

「山陽先生詩稿」訳注(二)

花本 哲志

「山陽先生詩稿」は、江戸時代後期に広島藩儒として、また能書家として知られた頼春水(二七四六〜一八一六)に始まる広島頼家に伝来したものである。形態は袋綴装大和綴で、縦二四・五センチ、横一六・五センチ、本文五十三丁で、共紙表紙である。第三丁表に朱文方印「頼氏必正楼」一顆が捺されている。批正は朱書・墨書によるもので、これにより推敲の過程を辿ることができる。欄外には墨書による注記や朱書による評語が記されており、原本を忠実に筆写したものと考えられる。

本資料には、二百一十一題、二百六十二首の詩と「皞々居記」が収録されている。山陽前半生の広島時代に作詩されたものであり、山陽青年期の詩作を知ることができる貴重な資料である。前号では、1 擬古(未詳)
2 紀遊五首(五首)(寛政九年) 3 詠古五首(五首)(寛政九年)
4 一谷歌(寛政九年) 5 湊川歌(寛政九年)の十三首について訳注を行った。

9年) 21 山崎(寛政九年) 22 美濃(寛政九年) 23 望岳(寛政九年) 24 題黄安仙人図(享和三年か) 25 閨情倣陸渭南(享和三年)
26 雨歇(享和三年) 27 江戸所見(寛政九年か・『頼山陽全書 詩集』は寛政六年とする) 28 赴竹原舟中作二首(二首・文化二年) 29 奉盈陪飲菅先生及家君席上分得眼字二十二韻(文化二年)の二十六首について訳注を行う。

本稿の作成にあたっては、原詩の漢字は旧字体を用い、俗字・略字になっているものも正字に改め、訓読の漢字は通行の字体を用いた。訓読の送り仮名は現代仮名遣いとした。翻刻にあたっては、推敲過程がわかるよう、原本に忠実に表記するようにし、訓読についても修正前の原案がわかるように併記している。訳文は、修正後の本文を反映させて訳出した。訳文ならびに語釈については、前号に引き続き、谷口匡氏(京都教育大学教授)に御教示をいただいた。ここに深甚なる謝意を表したい。

- 本号では、6 筑海行(寛政十年) 7 醍醐行(寛政十年)
8 鹹塚行(二首)(寛政十年) 9 書感(寛政五年) 10 甲寅
元日(寛政六年) 11 咏梅(寛政五年) 12 舟暁(寛政五年)
13 舟帰広島(寛政五年) 14 明妃(寛政五年) 15 暑日遊照蓮
寺(寛政五年) 16 石州路上(寛政八年) 17 甌坂(寛政八年)
18 夜坐(寛政八年) 19 青楼曲(文化二年) 20 東遊路上(寛政

- 6 筑海行
筑海颯氣連天黒
千艘臙臙來自北
- 筑海ちくかいの颯さか氣き
天てんに連つらなりて黒くろし
千艘せんそうの臙臙もうどう
北きたより来きたる

笑殺碧眼蒙古兒

笑殺す 碧眼 蒙古の児

功成意氣何自得

功成り 意気何ぞ自ら得ん

嚇得趙家孤與寡

趙家の孤と寡とを嚇し得たるを

以此準擬男子國

此れを以て準じ擬す 男子の國

相模太郎膽如甕

相模太郎 膽は甕の如し

防海將士人各力

防海の將士 人各力む

君不見風伯一驅附雲濤

君見ずや 風伯一驅して雲濤に附し

不使羶血饑日本刀

羶血をして日本刀を饑さしめざりしを

(起句・朱記) 不免襲北地

北地を襲うを免さず

【語釈】

『頼山陽全書 詩集』卷三所収「読元史」、『日本樂府』所収「蒙古来」の初案。寛政十年(一七九八)の作とされる。「颶風」大暴風。「饜饠」牛皮でおおつてあり、敵船に衝突してそれを突き破る細長い軍船。「趙家孤與寡」趙は宋の王室の姓。孤は孤兒、寡は未亡人の意。南宋第四代皇帝寧宗の皇后・楊太后と五代皇帝理宗を指す。「男子國」日本のこと。日本の古名を添能基呂島(『古事記』)といい、その語源の一つにヲノコジマ(丈夫島)があり、ヲノコは「男子」とも書いた。「相模太郎」鎌倉幕府執権北条時宗。「風伯」風の神。「羶血」なまぐさい血。「羶」は羊の生肉。

【訳】

筑前の海は、暴風の時の黒雲が天に連なったようにどす黒い。千艘の船に

乗った蒙古軍が北からやって来たのだ。碧眼の蒙古人が戦果を上げ、大意になつているのを大笑いする。彼らは南宋の朝廷の幼い王と太后を嚇し、その勢いでこの男児の国(日本)にやって来たのだ。だが、相模太郎(北条時宗)は肝が据わつて甕のようにびくともせず、海岸を守る將士たちも我先にと馳せ参じた。

君は見なかつたらうか。神風が吹いて大波が敵船を呑込んでしまい、蒙古の兵の生臭い血で日本刀を汚させなかつたのを。

(起句・朱記) 北の地を襲うことを許さない。

7 醍醐行

醍醐行

晃銀燭

銀燭 晃かに

醍醐花下人如玉

醍醐の花下 人玉の如し

落紅乱点

落紅 乱点す

相公酣眠紫錦褥

相公 酣眠す 紫錦の褥

相公醉眠侍姫扶

相公酔つて眠り 侍姫は扶く

嚙語咄々驚侍人

嚙語咄々として 侍人を驚かす

夢魂飞到遼海曲

夢魂飛び到る 遼海の曲

百萬漢兵吾斬劔

百万の漢兵 吾れ斬劔す

桐幟劔標臨燕京

桐幟劔標して 燕京に臨み

佇看

佇み看る

請見素車懸左纛

見えんことを請う 素車 左纛を懸るを

凱旋何^{がいせん}以^{なに}勞^{もつ}諸^{しよぐん}軍^{ねぎわ}
欲^あ嘗^た釀^{じよすい}遼^{りやう}瀆^{とく}水^{すい}鴨^{おつ}頭^{とう}綠^{りよく}
當^{あた}らんと欲^{ほつ}す 釀^{じよすい}水^{すい}鴨^{おつ}頭^{とう}綠^{りよく}

【語釈】

〔醍醐〕京都市伏見区の地名。慶長三年（二五九八）、豊臣秀吉が醍醐寺の三宝院で開いた花見の宴が知られる。この詩は、醍醐の花見を舞台に秀吉の朝鮮出兵について詠じたもの。「銀燭」美しく輝くともしび。「褥」柔らかい敷物。しとね〔相公〕大臣。ここでは関白のまま太政大臣となつた豊臣秀吉のこと。「酣眠」十分に眠る。「嚙語」寝言。うわ言。「咄々」事の意外なのに驚いて発する声。おやおや。「遼海曲」遼東湾のすみ。曲は湾曲した所。「鬪」鬪に同じ。叩き切る。「桐幟」豊臣秀吉の家紋である五七の桐をあしらつた幟旗のこと。「劔標」豊臣秀吉の馬印である千成瓢箪のこと。「燕京」北京の別称。明の都。「素車」彩色しない白木づくりの車。喪のときに使う。「左纛」古代中国で、天子の車のよこぎの左上に立てる羽毛でかざつた旗。「鴨頭」緑色。水の緑色と鴨の首の毛の色に喩える。ただし、「鴨頭緑」は朝鮮と明の国境を流れる鴨緑江をかけた表現か。

【訳】

ともし火が煌々と明るく
あちら
醍醐の花の下では人が玉のように美しく、紫色の錦の敷物の上には相
こちらに花びらが落ちてゐる 公は酔つて熟睡してしまい、侍女が支えている
公がぐつすり眠つてゐる。おやおやと寝言を言つては供の者を驚かせて
いる。遼東のあたりのことを夢に見ているのだろう。桐の紋の入つた幟
旗と千成瓢箪の馬印を掲げて北京に臨み、天子の車の左に旗が懸けてあ

竹^{たけ}んで見^みてゐるのたろう

るのを天子への面会を請うている。兵たちが凱旋してきたらどうやって彼らに報いてやるのか。鴨緑江の水で釀した酒を振舞つてやるのがふさわしい。

8 誠塚行

誠塚行

(1)

猴^{こうてい}類^{るうくん}郎^{なん}君^{はなは}何^ぶ太^た武^ぶ
樹^{じゆか}下^か起^お身^み本^{もと}僕^{ぼく}豎^{じゆ}
巨^{きよしょう}掌^{しょう}能^よ裂^{てん}天^か下^か來^{きた}
掌^{しようじよう}上^{じよう}撫^ぶ弄^{ろう}幾^{いく}熊^{くう}虎^こ
輪^{りんたい}臺^{たい}獨^{ひと}少^か霍^{かく}與^{えん}金^{きん}
王^{おうこう}侯^{こう}己^{おれ}君^{せむ}莫^も怒^{いか}
君^{くんか}家^か封^{ほう}建^{けん}今^{いま}何^{なん}く^かに^あ在^あら^ん
方^{ほう}廣^{こう}寺^じ前^{ぜん}一^{いち}堆^{たい}土^ど

【語釈】

〔誠塚〕戦で首の代わりに切りとつた敵兵の耳を埋めた塚のこと。耳塚。「猴」さ
る。ましら。「類」ひたい。額に同じ。「郎君」年若い貴公子、また、主家の息子を
敬つていう語。「樹下」豊臣秀吉の初名「木下、藤吉郎」を指す。「僕豎」僕童に同
じ。「裂天下」天下を分割して大名を封じること。『史記』「項羽本紀」の賛に
「天下を分裂して王侯を封じ」とある。「輪臺」漢代の西域の地名。武帝はここに屯
田を置こうとしていたが、民を疲れさせるので取りやめた。豊臣秀吉の朝鮮出兵に

諭えるか。「霍與金」霍去病と金日磾。漢の武帝が匈奴に出兵した時の將軍と、匈奴から漢に帰化させ、後事を託した人物。有能な將軍や後継者に諭えるか。「王侯叛已」『史記』「項羽本紀」の贊に「王侯の已に叛くを怨むるは難し」とある。「方廣寺」京都市東山区にある天台宗の寺。天正十七年（一五八九）、奈良東大寺大仏を模して豊臣秀吉が創建。大仏と大仏殿は焼失し、現在は本堂・大黒天堂・大鐘樓が残る。豊臣家滅亡のきつかけとなった「国家安康」の銘を記した釣鐘で有名。門前に文祿・慶長の役の際の耳塚がある。

【訳】

猿のような顔をした若君はなんと武に長じていることか。木下の姓で身を起こしたが、本をただせば僕であった。巨大な手のひらで天下を分割したが、手のひらの上で何人の猛者をもてあそんだらうか。輪台は手に入れたが、霍去病と金日磾を欠いていた。諸侯は自分に叛いてしまったが、君は怒つてはならない。豊臣家の封建制は、今となってはどこにいつてしまったか。ただこの方廣寺の門前の塚となつて残つている。

(2)

經營八表役群雄	八表を経営して 群雄を役す
身後何從見霸蹤	身後 何に従りて 霸蹤を見ん
臧塚青々一堆草	臧塚 青々たり 一堆草
獨留文祿舊提封	獨り留む 文祿の旧提封

【語釈】

〔經營八表〕天下を統治する。「八表」は八方のきわめて遠いところ。全世界。『史記』「項羽本紀」の贊に「力征を以つて天下を経営せんと欲す」とある。〔霸蹤〕覇者の功業のあと。〔提封〕諸侯の領土。封土。

【訳】

（豊臣秀吉は）天下を統一して数多の群雄を使役したが、その死後、覇道の足跡は何によつて見ることができらう。青々とした草に覆われたうず高い耳塚だけが文祿の役の際の封土の名残をとどめている。

9 書感

感を書す

十有三春秋

十有三の春秋

春秋去若水

春秋 去ること水の若し

何時吾志成

何れの時か 吾志成り

千古列青史

千古 青史に列せん

【語釈】

寛政五年（一七九三）の作とされる「癸丑歳偶作」（『山陽詩鈔』卷一所収）の初案。

『頼山陽全書 詩集』卷一所収。

〔春秋去若水〕「春秋」は年月。年齢。「癸丑歳偶作」では「逝者已如水」に改めてある。これは『論語』「子罕」第九に「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜」（子川の上に在りて曰く、「逝く者は斯くの如き夫、晝夜を舍かず」）を踏まえたもの。

〔千古〕永遠。永久。〔青史〕歴史。歴史書。紙のなかった時代、青竹の札をあぶつて文字を記したところから言う。〔千古〕歴史。歴史書。記録。

【訳】

十三年の歲月。歲月が過ぎ去るのは水が流れていくようなものだ。何時の日にか自分の志を成し遂げ、永遠に歴史に名を残したいものだ。

10 甲寅元日

甲寅の元日

黄鳥啾々□載陽

黄鳥 啾々 日載めて陽かなり

辛盤遙祝拜東方

辛盤 遙かに祝つて東方を拝す

青霞關上春風度

青霞關上 春風度り

知向西天憶故郷

知る 西天に向かい故郷を憶うを

【語釈】

「甲寅首春作。時懷家君在東邸」(『山陽詩鈔』卷二収録)の初案。甲寅は寛政六年(二七九四)であるが、木崎好尚は寛政五年(二七九三・癸丑)の作とする(後述)。

〔(日)載陽〕『詩經』『幽風』七月に「春は載めて陽かなり」とある。原本では

「日」が脱字であるが、『山陽詩鈔』によつて、「日」字を補つた。〔黄鳥〕鶯

〔啾々〕鳥がなごやかに鳴くさま。〔辛盤〕五辛盤の略。五辛(辛味や臭気の強い五種の野菜。仏家では大蒜・葱・荳蔻・野蒜、道家では、葱・荳蔻・大蒜・油菜・胡荽を指す)をまけて盤に盛つたもの。元日にこれを食べれば、五臓の気を通じ、健康を保つとされる。〔青霞関〕広島藩江戸藩邸があつた霞ヶ関のこと。

【訳】

鶯は和やかに鳴き、日の光も暖かい。正月の御馳走を前に遠く東方に向かつて礼拝している。霞ヶ関の青い空の上を春風が吹きわたり、西の空に向かつて故郷のことを思つてくれているのがわかる。

【注】この詩について、木崎好尚は『頼山陽全書 詩集』の中で次のように記している。

コノ詩、『山陽詩鈔』二八、「甲寅首春作」二作ル。而モ甲寅六年二八、春水江戸ニ在ラズ。

明年、亦然り。茲ニ「癸丑首春作」ニ改ム。

11 咏梅

梅を詠ず

風格孤高傲歲寒

風格 孤高にして 歲寒に傲り

一株 鎮

一株 鎮

枝々臨水幹龍蟠

枝々は水に臨み 幹は龍蟠る

幽堂自有松篁侶

幽堂 自ずから松篁の侶有り

休作過牆俗眼看

牆を過ぎて 俗眼の看を作す休れ

【語釈】

「詠梅」(『山陽詩鈔』卷二所収)の初案。寛政五年(二七九三・十四歳)の作とされる。〔孤高〕俗世間から離れて、ひとり自分の志を守ること。また、その様。〔歲寒〕

寒さの厳しい時節。冬。〔傲〕ものともしない。〔幽堂〕静かな部屋。墳墓。〔松篁〕

松と竹。冬の寒さの中でも緑を保つことから、逆境でも節操を変えない人に喩えられる。

【訳】

その風格は、俗世間を離れて気高く、厳しい寒さをものともしていない。一株の梅の古木が池の水に臨む姿は静かな龍がうずくまっているようだ。静かな部屋にはおのずから松や竹が伴っている。だから、垣を越えて枝を伸ばし、俗人に見てもらおうなどと思わないことだ。

12 舟暁

しゅうきょう
舟 暁

細雨篷窓客夢間

さいう 篷窓 客は夢の間

蒲帆夜過幾青山

ほはん 夜過ぐ 幾青山

水禽憂々呼人去

すいきん 憂々 人を呼びて去る

起見峯頭月一彎

おき 見 峰頭の月一彎

【語釈】

『頼山陽全書 詩集』卷一所収。

「篷窓」とまぶさの小舟の窓。「蒲帆」がまの葉で織った、舟の帆。「憂々」鶴など、鳥の鳴き声がするさま。

【訳】

霧雨が小舟の窓にかかって、旅人は寝入って夢の中におり、粗末な小舟は

幾つもの山々も過ぎ夜の中を走っていく。水鳥が私を呼ぶように鳴いて飛び去ると、起き上がって峰の上にかかる弓張月を見ている。

13 舟歸廣島

ふね ひろしま
舟 広島に帰る

十幅春帆懸落暉

じゅうはくしゅんぱん 落暉を懸け

海風滿吹薛蘿衣

かいふう みちて吹く 薛蘿の衣

柁樓指點廣洲樹

たろう 指点す 広洲の樹

天主臺頭霞片飛

てんしゅう だいとう 霞片飛ぶ

【語釈】

『頼山陽全書 詩集』卷二所収。

「春帆」春ののどかな海に浮かんだ船。また、その帆。「落暉」沈む太陽。落日。「滿吹」『頼山陽全書 詩集』では「吹滿」に作る。「薛蘿」柁の葛と葛。またそれで織った布。粗末な服。特に、隠者の服をいう。「柁樓」和船の船体後部のやぐら。ともやぐら。「広洲」広島のこと。

【訳】

春の海に浮かんだ船の長い帆には夕陽が差し、海からの風が私の粗末な服に吹き付けてくる。舟の柁樓から広島街の樹々を指さしていると、天守閣の上には雲がかかっている。

14 賦得明妃

明妃を賦し得たり

一曲

一曲

馬上琵琶凋麗姿

馬上琵琶 麗姿凋う

辭鳳闕

鳳闕を辞し

遠离至尊馬行遲

遠く至尊を離れ 馬の行くこと遅し

風沙撲面雲鬢亂

風沙面を撲ちて 雲鬢乱るるも

毛家

毛家の

猶勝漢宮入畫時

漢宮の画に入りし時に勝る

【語釈】

『頼山陽全書』卷二所収。

〔明妃〕前漢・元邸の妃・王昭君のこと。「落暉」沈む太陽 「至尊」天子。天皇。

〔鳳闕〕王宮の門。また、宮城・皇居の異称。禁闕。鳳城。中国の漢代、宮門の左右にある高殿に銅製の鳳凰を飾ったことによる。「毛家」毛延寿(前漢時代の画家、人物を能くした。前漢の元帝は、後宮の女官を引見することが出来なかつたので、画工にその像を描かせ、それによつて選んだ。毛延寿はその時の画家の一人。女官たちは、画工に賄賂を贈つて美しく描かれることを望んだが、王昭君は賄賂を贈らなかつたので元帝に目通りする機会を逸し、匈奴に送られることになった。元帝は王昭君の容姿を見て惜しみ、初めて不審を抱き、調べたところ、画工たちの不正が発覚し、処罰されるに至つたという(『西京雜記』卷二)。

(欄外)

裂帛聲中凋麗姿

裂帛の声中 凋麗の姿

紫臺一去曷歸期

紫台 一たび去りて 曷か歸期ならん

【語釈】

〔裂帛〕帛を引き裂く音。また、そのように鋭い声。「歸期」帰る時期。帰る時。

【訳】

一曲を奏でる琵琶の音は、(王昭君の)美しくもやつれた姿を伝えている。はるか遠く宮城の門に別れを告げたが、馬の歩みは遅い。砂埃が顔を打ち、美しい鬢は乱れてはいるが、それでもなお毛氏(毛延寿)が画に描いた時よりも美しい。

(欄外・訳)

帛を引き裂くような琵琶の音の中にも悲しく麗しい姿が見える。一たび宮殿を去つてしまえば、いつ帰つてこられるのだろうか。

15 暑日遊照蓮寺

暑日 照蓮寺に遊ぶ

人間炎熱苦煩初

人間の炎熱 苦煩の初

來訪高僧林下居

來訪す 高僧林下の居

脩篁開處微涼過

脩篁開く處 微涼過ぎ

卧見閑雲浮碧虚

卧して見る 閑雲碧虚に浮かぶを

【語註】

〔暑日〕暑い日。〔照蓮寺〕〔人間〕俗人の住んでいる世界。世間。〔脩篁〕長い竹。〔微涼過〕中唐の詩人・耿湜の五言律詩「夏夜西亭即事」に「微涼 扇を待つて過ぐ」とある。〔閑雲〕ゆつたりと空に浮かぶ雲。〔碧虚〕碧空。晴れ渡った空。青空。

【訳】

俗世間の暑熱がわずらわしくなって、林の中にある高僧の家を訪れた。長い竹が伐り開かれている所から微かな涼しさがおとずれる。私は寝転んで青空にゆつたりと浮かぶ雲を覗いている。

【注】『頼山陽全書 詩集』巻二には「舟曉」「舟歸廣島」「暑日。遊照蓮寺」「明妃」の順で収録されており、この四首について、木崎好尚は次のように記している。

以上四首、幼年ノ作タルコト明徴アリ、而モソノ何レノ年ニ繫クベキカヲ知ラズ、コヽ(寛政五年)ニ附載ス。「明妃」ノ詩、「二曲琵琶」ヲ「裂帛聲中」ニ、「毛家」ヲ「當初」ニ改ム、蓋シ杏坪ノ手ニ出テシナルベシ。

16 石州路上

石州路上

雨過泉聲逾喧

雨過きて泉聲 逾 喧しく

木落山骨尤瘠

木落ちて山骨 尤も瘠せたり

今朝杖底千岩

今朝 杖底の千岩は

昨日天邊寸碧

昨日 天辺の寸碧なり

【語釈】

『山陽詩鈔』巻二所収。寛政八年(一七九六)十月二十六日、山陽(十七歳)は叔父杏坪に伴われ、石見国の有福温泉(現在の島根県江津市の南西部)に赴いた。この「石州路上」と「甌坂」はその道中の作である。

〔山骨〕山の土砂が崩れ落ちて岩石の露出した所。また、その岩。〔寸碧〕少しの緑。韓愈・孟郊「城南聯句」に「遙岑(遙か遠くの峰)寸碧を出だす」(韓愈)とある。山の緑が遠くから見ると一寸ほどの小ささになることをいう。

【訳】

雨がやみ、溪谷を流れる川の水音はいよいよ大きくなり、木の葉は落ちて山肌もあらわになっている。今朝、杖を頼りに登っているこの山路は、昨日、大空の果てに小さく見えていたあの青だ。

17 甌坂

甌坂

行覚溪雲脚下生

行覚ゆ 溪雲の脚下に生ずるを

危巖夾水一橋横

危巖 水を夾んで一橋横たわる

登登峽路天將黑

登登たる 峽路 天将に黒からんとす

聞斷溪童搗紙聲

聞斷す 溪童の紙を搗く声

(批評・朱筆)

風土詩、一誦恍歷其境

風土の詩。一誦すれば恍として其の境を歴たり。

【語釈】

『山陽詩鈔』卷二所収。「甌坂」現在の島根県浜田市旭町市木の市木川沿いにある坂。越木坂とも。「危巖」険しくそびえ立つ岩。「登登」上り坂が続くさま。盧綸「山店」に「登登たる山路何れの時にか尽きん」とある。「峽路」谷あいの道。「搗紙」紙を作る工程。楮を煮て水に浸したものを棒で打つ。

【訳】

歩いていると雲が脚の下から生じているように感じ、高い岩が谷川をはさみ、そこに橋が架かっている。谷あいの長い坂道を登っていくうちに日は暮れかかっており、谷間の民家でこどもたちが紙を搗く音がとぎれがちに聞こえる。

(批評・朱筆)

土地のありさまを描いた詩である。これを一誦すれば、ぼんやりとその場所を通り過ぎていくようだ。

【注】『頼山陽全書 詩集』では「石州路上。三首」として収録され、寛政八年(二七九六)十月下旬の作としている。

18 夜坐

夜坐

一榻燈花落復生
半榻琴書一短檠

一榻の燈花 落ちて復た生ず
半榻の琴書 一短檠

火紅茶鼎似蟬鳴

火紅にして茶鼎蟬の鳴くに似たり

細談相對坐三更

細談 相對し 三更に座す

窓邊知有芭蕉樹

窓辺 知る 芭蕉樹の有るを

久

久しう

夜靜時間墜露聲

夜靜かにして時に聞く墜露の声

(欄外)

一榻燈花照兩情

一榻の燈花 兩情を照らし

火紅鼎茶似蟬鳴

火紅にして鼎茶 蟬の鳴くに似たり

【語釈】

「夜坐」(『山陽詩鈔』卷二所収)の初案。寛政八年(二七九六)の作とされる。

「二榻」一つの腰かけ・寝台。『山陽詩鈔』では「二穗」に改める。「燈花」燈火の灯心の先にできる燃えかすが花の形に固まったもの。孟浩然の五言律詩「寒夜」に「夜久しくして燈花落つ」とある。「茶鼎」茶釜。「短檠」背の低い燭台。「三更」五更の第三。およそ現在の午後十一時または午前零時からの二時間をいう。子の刻。丙夜。「墜露」滴り落ちる露。『楚辭』屈原の「離騷」に「朝飲木蘭之墜露兮」(朝には木蘭の墜露を飲む)とある。

【訳】

の上の燈火は燃えかすが落ちてはまたできあがる。赤々と火が着き、茶釜の湯が沸

腰かけ半分の琴と燭台一つ。膝を突き合わせて三更(深夜)に及ぶ。

いて蟬せみの鳴くような音を立てている。 更あけていき
窓の外を見ると、側に芭蕉の木があるのが分かった。夜は静しずかで、時おり露が滴たる音が聞こえてくる。

(欄外)

腰かけの上の灯火の燃えかすが二人の心を照らしている。赤々と火が着き、茶釜の湯が沸いて、蟬の鳴くような音を立てている。

19 青樓曲

青樓曲せいろうきょく

曉日秋風十二欄 曉日ぎょうじつ 秋風しゅうふう 十二欄じゅうにらん

鴛鴦衾裡暖猶殘 鴛鴦えんおう衾きん裡に暖だん猶な殘のこる

知是朝來多霜氣 知し是こ朝ちよう來らい霜そう氣き多おほく

阿郎歸路不禁寒 阿郎あろう 歸路きろ 寒さむきに禁たえざるを

【語註】

〔曉日〕朝の太陽。〔十二欄〕十二層の欄干。初唐の詩人・駱賓王の七言古詩「帝京篇」(『唐詩選』卷二)所収に「大道の青樓 十二重」とあり、女性の住む美しい樓閣を形容した語であろう。〔青樓曲〕盛唐の詩人王昌齡(六九八〜七五七)に同名の七言絶句二首があり、そのうち一首が『唐詩選』に収められている。青樓は、高貴な人や美女の住む家。妓樓。昔、中国で青漆を塗ったところからいう。〔鴛鴦衾〕夫婦や男女が共に寝る布団。〔霜氣〕肌を刺す冷気。

【注】この詩は『頼山陽全書 詩集』巻四に文化二年(一八〇五)の作として収録されている。

【訳】

朝日が差し、秋風が吹き付ける十二層の手すり。男女が眠っていた布団の中はまだ暖かさが残っている。朝の冷気は厳しく、旦那は朝歸りの道すがらさぞ寒い事だろう。

20 東遊路上

東遊路上とうゆうろじょう

書劍青年始辭家 書劍しよけん 青年せいねん 始はじめて家いえを辭じし

山陽風色接京華 山陽さんようの風色ふうしよく 京華けいかに接せつす

旗亭處々呼人醉 旗亭きてい 處々しよしよに人ひとの醉すいを呼よび

一路春風野菜花 一路いちろ 春風しゆんぷう 野のの菜花さいか

【語註】

〔書劍〕書物と劍。むかしの文人が常に携帯したもの。〔風色〕眺め。景色。風景。〔旗亭〕酒場。中国で酒旗とよぶ旗を立て目印としたことによる。
【注】この詩は『頼山陽全書 詩集』巻二に「入撰」の題で収録されており、寛政九年(一七九七)三月二十三日の作とされている。

(欄外・朱批)

趙閑々太平有

趙閑々の「太平象有り」。

象邨々

邨々の酒」。

此句

此の句に譲るに似たり。

尋常語、使人憶曾遊

尋常の語。人をして曾ての遊を憶わしむ。

不嗟時訥(病か)

時病に嗟せず。

【語注】「閑々」金の詩人・趙秉文(二二五九〜二三三〇)の号。

【訳】

書物と剣を持つて青年はじめて家に別れを告げ、山陽道の風景や華やかな京の街の賑わいに接している。ここかしこの酒場は酔った人々で賑わい、路上には春風が吹いて、野には菜の花が咲いている。

(欄外・朱批)

趙秉文(金の詩人、号は閑閑居士)の「太平象有り邨々の酒」(太平に定ま

たすがたがあるとすれば、村々の酒だ)。「春游四首」其の四)の句は、(山陽の)この句に一步譲っている。尋常の語であり、人にかつてそこに遊んだことを思い起こさせる。時代の弊害に墮していない。

21 山崎

山崎

猿面將軍蓋世豪

猿面の將軍 蓋し世豪

素衣問罪班旌旄

素衣 罪を問い 旌旄を班つ

不須三老勞迎説

須いず 三老の迎説を勞するを

英慨由来優漢高

英慨由来 漢高に優る

【語注】

「山崎」京都府乙訓郡大山崎町と大阪府三島郡島本町にまたがる一帯の古称。天正十年(二五八二)、山崎の戦で豊臣秀吉が明智光秀を破り、天下統一の基礎を作った。「素衣」白色の喪服。織田信長の死後、その喪儀は秀吉の手で行われたので、このように言う。「問罪」罪を糾弾する。ここでは本能寺の変で信長を滅した光秀を討伐すること。「旌旄」旗竿のさきに旄という旗飾りをつけ、これに鳥の羽などを垂らした旗。軍中において指揮に用いる。「三老」中国古代に県や郷に置かれた、教化をつかさどる官。ここでは秦末の農民陳勝が三老たちにおだてられて王になったこと(『史記』「陳勝世家」)を踏まえる。

【注】この詩は『頼山陽全書 詩集』巻二に寛政九年三月二十五日の作として収録されている。

【訳】

猿に似た風貌の將軍(豊臣秀吉)は、思うに天下に名だたる豪傑である。喪服を着て敵の罪を問い、軍旗を分け与えて戦陣を指揮した。三老たちの追従を俟つまでもなく、その英雄としての気概はもともと漢の高祖(劉邦)にも勝つてゐる。

22 美濃

美濃

稍 地勢漸開變土風
 烟消大野夕陽紅
 獨彈孤劍看東北
 満目雲山接越中

稍 地勢漸く開け 土風変ず
 煙は消え 大野 夕陽紅なり
 ひとり孤劍を弾じて 東北を看れば
 満目の雲山 越中に接す

【語註】

『頼山陽全書 詩集』卷三所収「美濃」の初案。寛政九年三月二十八日の作とされておられ、起句の「地勢」が「地物」に改められている。

〔土風〕その地方の風俗・風習。〔大野〕広大な野原。〔満目〕見たすかぎり。〔彈孤劍〕一振りの劍をたたく。『史記』「孟嘗君列伝」に「馮先生甚だ貧しく、猶お一劍あるのみ。……其の劍を弾じて歌いて曰く、長鋏歸來らんか。食らうに魚無し、と。……」とある馮驩の故事に基づき、貧しい士が富や地位を求めることをいう。

【訳】

地勢が次第に開け、風俗が変わってきた。靄が晴れて、大きな平野に真っ赤な夕陽が落ちている。一人この一振りの劍をたたいて東北の方を見れば、見渡すかぎり、雲のかかった高い山々が越中の国に接している。

23 望岳

岳を望む

狂波撼地々掀翻
 昔日腥羶侵相武
 鎮壓長憑此岳存
 天挑茲岳代籬藩
 一杖會當 絶
 吾將杖屐凌其項
 看海如

狂波地を撼かし地は掀翻
 昔日腥羶 相武を侵し
 鎮圧長く憑む此の岳の存するに
 天 斯の岳を挑げて籬藩に代う
 一杖 会す当に絶頂
 吾 將に杖屐して其の頂を凌がんと
 看海 如

【語註】

『頼山陽全書 詩集』卷二に収録されている。寛政九年（一七九七）四月、江戸遊學中の作とされる。

〔掀翻〕高くもちあがり、ひるがえること。〔腥羶〕なまぐさいこと。ここでは源氏と北条氏による血なまぐさい争いを指すか。〔相武〕相州と武州。〔籬藩〕藩籬・藩屏に同じ。垣根。垣。防備のための囲い。守護するもの。特に、王家を守護するもの。

【訳】

狂ったように襲いかかる波が地を揺らして、地が持ち上がり、暴乱の平定は長い間この岳かつて血腥さが相模と武蔵に深く入り込み、天はこの岳（富士山）を地か

(富士山)の存在に頼ってきた。 一本の杖を突いてきつと

らぼじくり出して困いに代えた。私はこれから杖を突いて歩いてその頂上に立ち、大きな盆はちのような太平洋を見たいものだ。

24 題黃安仙人圖 黃安仙人図に題す

一萬五千餘歲間 一万五千余歳の間
敗家亡國幾傍觀 家を敗り 国をこつ 幾傍觀
九重之席三臺坐 九重の席も 三台の坐も
不若黃安龜背安 黃安の龜背の安きに若かず

【語註】

〔敗家亡國〕家や国を亡ぼす。『孟子』離婁上に「不仁にして与に言うべくんば則ち何ぞ国を亡ぼし、家を敗ること之有らんや」とある。〔九重〕天子。〔三台坐〕三公の地位の意。三公は、大尉・司徒・司空。『後漢書』劉玄伝の註に「三公は天に在つては三台たり」とある。〔黃安〕中国前漢の武帝時代(前二四〇〜前八七)の仙人。三尺の龜の背に乗っており、その龜は二千年に一度首を出すといひ、黃安はそれを五回見たといふ(『洞冥記』)。

【訳】

一万五千年余りの歳月の間、敗亡した家や国をどれほどそばで見てきただろうか。天子の席も三公の座も黃安仙人が乗る龜の背中の安らかさには及ぶまい。

【注】この詩は、『頼山陽全書 詩集』卷三に収録されており、享和三年(二八〇三)の作とされる。

25 閨情倣陸渭南

閨情。陸渭南に倣う

繡罷蛾眉重於山 繡し罷りて 蛾眉山より重く
亂雲不收雙髻鬢 亂雲 収まらず 双髻鬢
斜倚薰爐坐至晚 斜めに薰爐に倚り 坐して晩に至り
聞盡遠鐘逗花間 聞き尽くす 遠鐘 花間に逗まるを
脈ゆ々芳心向誰語 脈々たる 芳心 誰に向かいて語らん
勾欄獨有新月觀 勾欄 独り新月の觀有り
亡頼膝上小狸奴 亡頼 膝上の小狸奴
梅花窗前呼匹忬 梅花窓前に匹を呼びて去る

(朱書) 六如遺響 六如の遺響なり。

【語註】

『頼山陽全書 詩集』卷三所収「閨情倣陸渭南」の初案。享和三年の作とされる。〔閨情〕思ふ人待つ女性の思ひを詠じる。(陸渭南)中国南宋の文人陸游(二二五〜二二〇)。陸游は山陰(浙江省)の人で、字は務観。放翁と号した。南宋第一の詩人として、北宋の蘇東坡(蘇軾)と並び称される。著作に「劍南詩稿」「放翁詞」「渭南文集」などがある。〔蛾眉重於山〕臉が重く、眠くなることを言うか。宋の僧有規の詩に「書を読みて已に覚ゆ 眉稜重きを」とある。〔亂雲〕女性

の乱れた髪のの喩え。「髻もと」束ねて輪にした髪。「斜倚しゃい」身をもたせかける。白居易「後宮詞」に「紅顔未だ老いざるに恩先まず断え 斜くめに薫籠くんろうに倚りて坐して明に至る」とある。「薫爐くんろ」香炉。「脈ま」この句、『詩集』では「脈脈ま芳心向誰語」に作るので、「ヒ」は「々」の誤りであろう。「脈脈ま」は思いを胸に秘めるさま。「芳心ほうしん」美人の心。「勾欄こうらん」手すり。妓楼。「小狸奴せうりぬ」猫の雅称。陸游の「贈猫」に、「塩を裏うみて迎え得たり 小狸奴」とある。「亡頼むつら」無頼に同じ。ものを憎みののしる語。

【訳】

化粧して美しい眉を引き終わると、その眉は山よりも重く、二つ並んだ丸まげは乱れておさまりがつかない。香炉に凭れて座っているうちに晩まになり、遠くから聞こえる鐘の音が花のあたりにとどまっているのに聞き入っている。

胸に秘めた美人の思いを誰に向かつて語るのか。手すりからは新月だけが中を伺うように空にあるのが見える。膝の上の猫め、おまえも梅の花が咲く窓辺に連れ合いを呼んで去っていくのか。

(朱書) 六如(明代中期の文人で、画家として有名な唐寅(一四七〇～一五三三)の号)が遺した詩の趣に通じる。

26 雨歌

雨歌あめうたむ

窓前雨聲歌

窓前そうぜん 雨声うせい 歌うたむ

初日在楣間

初日しよじつ 楣間びかんに在あり

高士春眠覺 高士こうし 春眠覺しゆんみんさ
開軒見遠山 軒まどを開ひらきて 遠山えんざんを見みる

【語注】

「楣」のき。ひさし。「春眠」春の夜の快い眠り。春の眠り。

【訳】

窓の前では雨がやみ、庇ひさしのあたりに朝日が見える。高潔な隠士は春の心地よい眠りから目覚め、窓を開けて遠くの山を眺めている。

【注】24・25・26は、いずれも『頼山陽全書 詩集』巻三に享和三年(一八〇三)、二十四歳の作として収録されている。

27 江戸所見

江戸所見えどしよけん

満街盡着鬪氈衣

満街まんがい尽ごとく着ちやくす 鬪氈けいせんの衣

四十八團半出旂

四十八團しじゅうはちだん半なかば旂はたを出いだす

萬衆傳呼郎騎至

万衆ばんしゆう 伝つたえ呼よべば 郎騎ろうきして至いたり

反簷一笠破群飛

左簷さえん 一笠いちりゆう群むれを破やぶつて飛とぶ

【語注】

「四十八團」江戸時代の町方の消防組織「いろは四十八組」のこと。「鬪氈衣」火事装束として用いられていた革羽織のこと。鬪氈は毛織物。「旂」旗に同じ。「萬衆」

多くの人。有衆。衆庶。「反簷」「左」の誤写か。「詩集」は「左」に作る。「笠」
火事装束として用いられていた陣笠を指すか。

【注】この詩は『頼山陽全書 詩集』巻二では「春夜家君為仲父大人説江戸防火状
態。某侍聴。詩以記之」の題で寛政六年(一七九四)作として収録。その注には、
「『山陽詩鈔』二八「江戸所見」ト改題シ、江戸游学中ノ作ニ列セリ。」とあるが、
現行の『山陽詩鈔』にはこの詩は見えない。

【訳】

街中至る所で革羽織をまとい、四十八組の内、半分は旗を掲げている。
人々が触れ回ると、男たちは馬に乗って駆け付け、左の庇あたりで陣笠をか
ぶった一人が群れの中から跳び上がった。

28 赴竹原舟中作二首

竹原たけはらに赴おもむく舟中しゅうちゅうの作さく、二首にしゆ

(1)

波聲喧枕底 波聲はせい 枕底ちんせいに喧かまひしく
舟子夜相呼 舟子しゅうし 夜相呼よるあいよぶ
獨掲篷窗望 ひとり 篷窓ほうそうを掲かかげて望のぞめば
江天落月孤 江天こうてん 落月孤らくげつこなり

【語注】

「舟子」船頭。水夫。「篷窓」とまぶきの小舟の窓。「江天」川に接し、その上にひろ

がつている空。

【訳】

枕の下では波の音が喧しく、船頭たちは夜の間に、大きな声で呼び合ってい
る。一人とまぶきの小舟の窓から篷を上げて遠くを望むと、空には西に傾く
月がぼつんと二つ見える。

(2)

數尺船窗裡 數尺すうしゃく 船窓せんそうの裡うち
青山次第生 青山せいざん 次第しだいに生しょうず
頻呼三老去 頻しきりに三老さんろうを呼よびて去さり
指點問山名 指點してんして山やまの名なを問とう

【語注】

「青山」樹木が青々と茂っている山。「指點」指でさし示すこと。指示すること。

【訳】

数尺ある船窓からは、青々と樹木が茂った山が次々と見えてきた。しき
りに長老たちに声をかけ、指さしては山の名を問うている。

【注】この詩は、『頼山陽全書 詩集』巻四に文化二年(一八〇五)八月二十六日の
作として収録されている。

29 奉盈楼陪飲菅先生及家君。席上分得眼字。二十二韻。

奉盈楼にて菅先生及家君に陪飲す。席上眼字を分ち得たり。
二十二韻。

木氏家累千金産
千槽釀酒甚醜
新築高樓對囓囓
樓頭會客頻折簡
琥珀光溢紅螺瓊
棘鬣之魚厨人弗
滿樓賓客相見筦
逸趣真如鷺鳥獲
今日會此一時撰
劣才豈如群羊羸
後備高人其目□
矍鑠之容毳兮僞
吁我父子如車轆
病骨日隆詩骨剗
險韵至手不容揀
燈下苦吟摩病眼
此行禁憫
宿好譬之苦負蝨

木氏の家累 千金の産
千槽の釀酒 酒甚醜
新築の高樓を築いて囓囓に對し
樓頭 客を會して 頻りに簡を折る
琥珀の光溢つ 紅螺の瓊
棘鬣の魚 厨人の弗
滿樓の賓客 相見の筦
逸趣 真に鷺鳥の獲なるが如し
今日 此に會するは一時の撰
劣才 豈に群羊の羸がるに如からんや
(未詳)
矍鑠の容 瑟にして僞
吁 我が父子車轆の如し
病骨 日に隆く 詩骨は剗たり
險韻 手に至り 揀ぶ容からず
燈下の苦吟 病眼を摩す
此の行 憫宿の好を禁すれば
之を負蝨に苦しむに譬う

醉語不倫奚須報
邂逅相逢樂何限
歸輿將涉山峻々
衰柳願煩諸君縮
醉語 不倫にして 奚んぞ報するを須いん。
邂逅 相逢うて 樂しみ 何の限りぞ
歸輿 將に涉らんとして 山峻々
衰柳 願わくは 諸君の縮を煩わさん

(欄外)

当日情境一々在
目、近日詩大声
壯語、少此實際
当日の状況一々目に在り。
近日の詩、大声壯語
此の實際少なし。

【語注】

「席上分得眼字」その場で韻字を分け合つて「眼」の字を得た、の意。詩の韻字を割り当てられ、「眼」の字及びそれと同じ韻目(平水韻で上声十五濟)に属する字を用いて作詩することを言う。「木氏」竹原の商人正木氏。「家累」家にある財産。「酸」さかずき。小さな杯。甚酸の「甚」は数や量が多いの意か。「囓囓」「囓囓」に同じ。山の屈曲しているさま。「折簡」紙を切つて手紙を書く。ここは漢詩を作つて書くことを指す。「紅螺」あかにしの貝殻で作つたさかずき。転じて、さかずき。「矍」小さい玉製のさかずき。「毳」とするが「鷺」の誤写であろう。「鷺鳥」は突き刺す道具。「鷺鳥」『詩集』は「鷺」とするが「鷺」の誤写であろう。「鷺鳥」は猛々しい鳥。荒い鳥。「獲」はやく飛ぶさま。「撰」天地自然の法則。「詩骨」正しくは「瑟兮僞」。外貌は威厳があり、内心はゆつたりしているさま。「詩経」衛風・淇奥に衛の武公の徳をほめて「瑟たり僞たり」とある。「車轆」ねぐるま。寝台車。「轆車」といふべきところを押韻の関係で転倒したもの。「剗」削る。平らにする。

〔險韻〕その韻に含まれる字が少なくて、それを用いて漢詩をつくるのがむずかしい韻目。難韻。上声十五漕もその一つ。〔揀〕選ぶ。より分けて選び出す。〔欄〕樂しむ。「負蟻」重い物を背負うこと。『論語』郷党篇に「負版の者に式す」とあり、「負版」で戸籍台帳を背負う意であるが、柳宗元の「蟻蟻伝」は、重い物を好んで背負う虫を蟻蟻と呼んでいる。『詩集』は「蟻」を「蝦」に改めているが、韻が合わない。〔醉語〕醉言。酔った上でのたわむれ。酔っているようなたわむれのことば。〔賤〕賤に同じ。山の険しいさま。〔綰〕曲げて輪にするのが原義だが、ここでは旅立つ人に柳を手折って渡す動作を指すか。

【訳】

正木氏の家産は巨万の富。千を数える樽で醸される酒はどれほどの杯数になることか。新築された奉盈楼は屈曲した山に面し、楼の上では客が集まって小さな紙に頻りに何か書いている。杯の中は琥珀色の酒で満ちており、厨房では料理人が鯛を串焼きにしている。楼に集まった大勢の賓客は向かい合って笛の音を聴き、世俗を脱した趣は、まさに猛々しい鳥が飛ぶかのようである。

今日ここに参集しているのはひと時の偶然だが、私のような劣才は羊の群れにも及ばない。(未詳)

〔誤〕
 群れにも及ばない。(未詳)

ああ、私たち父子は寝車に乗っているようなものだ。病は進み、詩の風格も無いようなもの。難しい韻に当って、語を選ぶ余地がなく、灯の下で疲れた目をこすりながら苦吟している。

今回の旅行はゆつたりと楽しむことができず、重い物を背負う苦しみに

も似ているが、酒に酔った言葉はなかなか他にないもので、恥じることはない。思いがけない出会いの楽しみにどうして限りがあるうか。帰りの駕籠はこれから険しい山を越えることになるが、願わくは、皆さんには枯れかけた柳を手折って見送っていただきたいものだ。

〔欄外〕

当日の情景は、その一つ一つが今も目に浮かんでくる。最近の詩は大言壮語であり、このような事実の描写が少ない。

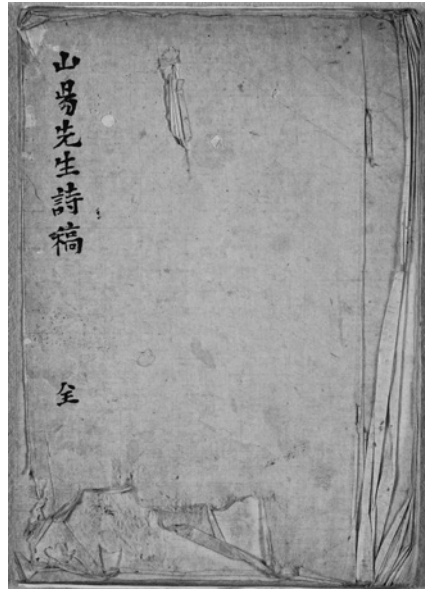
【注】この詩は、『頼山陽全書 詩集』巻四に文化二年(一八〇五)九月二十一日の作として収録されている。『頼山陽全書 全伝 上巻』文化二年九月二十日に「茶山等と共に、正木家を訪ひ、席上「奉盈楼記」、及び七古の作あり」とある。

【お詫びと訂正】

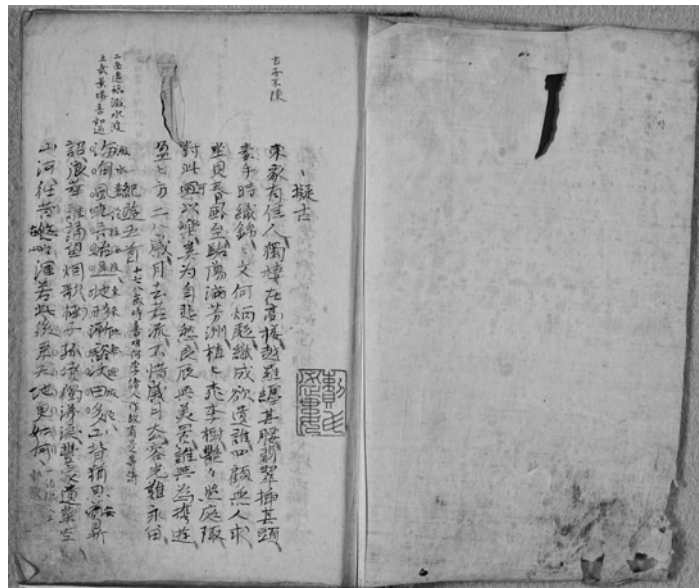
前号(『研究紀要』第24号)掲載の「山陽先生詩稿 訳注(二)」の本文中に左記のとおり誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

○P 118	下段11行目	妖氣	↓	妖氣
○P 118	下段8行目	黒波を蹴り	↓	黒波を蹴踏して

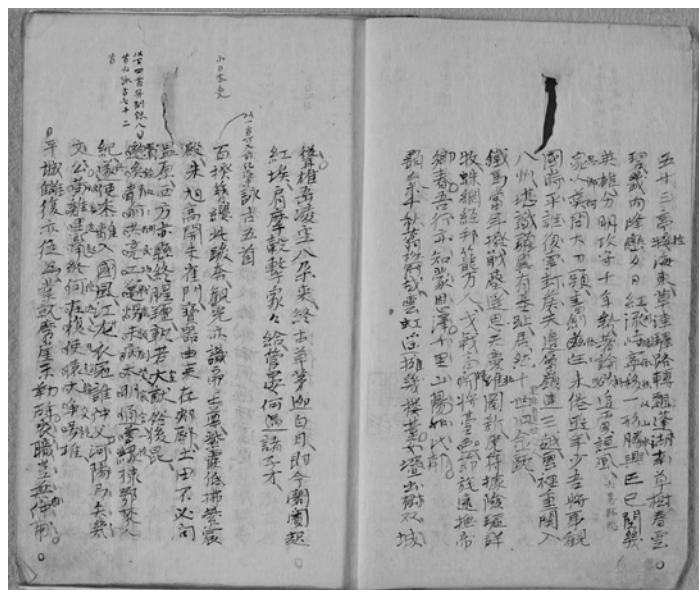
〔誤〕
 妖氣
 〔正〕
 妖氣



巻頭



1



2

去赴見年頭月一變、
舟揚屋
 十篇春風暖睡海風滿吹落難衣杖棹指點原洲
解風
 野天至雲頭霞長飛、
解風
 馬正狂若潮聲遠、
解風
 白雲時時入眼時、
解風
 人間炎熱苦煩初來訪高僧林下居、
 區耶見對雲浮瑞霞。

一册書光如
 情火白如
 小陸島

一册書光如
 情火白如
 小陸島

6

昨日秋風十二欄、
東並路
 山陽原色接、
 地勢漸開、
 北滿目雲山接、
 一册三十餘歲、
 一册三十餘歲、
 一册三十餘歲、

7

觀巨嶺、
 江戶所見、
 一册十二、
 一册十二、
 一册十二、

8